

選択プロジェクト「附属発！未来のスポーツ」 5年間のまとめ

飯島幸久

1、はじめに

本校に選択プロジェクトと名づけられた教科ができて、5年になる。はじめて担当をした大林直美が、その年のまとめで、以下のように記述している。

選プロって私がやるの？

年度末に近づき、新年度は中学3年生の担任を持つことが決まった。それは同時に、新しい教科「選択プロジェクト」の担当者となったことを意味した。「選択プロジェクト？」「何をするの？」中学3年生の担任をするともれなくついてきますという付録のような仕事は、実は未知の膨大なエネルギーを要する仕事だった。プロジェクトスタートの今年は、たまたま私が担当するが、来年になれば体育科教員のだれが担当するか分からない。ということは、私個人の企画ではなく、来年も再来年も誰が担当しても教えることができる体育科としての企画を立てなければならなかった。しかし、体育科としての方針も見いだせぬ前に、来年度受講する生徒に向けての授業内容の紹介を早々にすることになった。

こんな形で始まった選プロ「附属発！未来のスポーツ」も、1年目大林、2年目中村明彦が担当し、その後の3年間飯島が担当してきた。そろそろ5年間のまとめを、研究紀要に留めておくことが必要と思い執筆することにした。

2、授業内容

1 身近な道具を使ってどんな運動ができるか挑戦

- ・教室の椅子をつかった運動を考えてみよう

2 身近なスポーツって遊ぶこと？

- ・昔の遊びについて祖父・祖母・父親・母親から聞き取りをおこなう。
- ・2つぐらいを紹介し、全員で体験しあう

3 ニュースポーツを体験しよう

- ・既存のニュースポーツ（ソフトバレーボール、インディアカ、フラッグフットボール、ゲートボール、スカイクロス）を体験

4 新しいスポーツを創ろう！

- ・グループで1つの新しいスポーツをみんなで考案する

- ・既存の道具？手作りの道具？試台場は？いろいろ検討し、実際にプレイをしてみる
- ・ゲーム時間、チームの人数、ルールを検討して競技が成立するかどうかを考える
- ・各グループが考案した競技（スポーツ）を発表する
- ・全員がそれぞれの競技（スポーツ）を体験する

授業は2時間連続、隔週で行われ、中2と中3の異年齢・男女共修の生徒構成で行われる。その特徴から、普段の授業で行うスポーツの補強を期待することはできないし、体力差や運動能力の差が激しいなかで、運動能力の差を集団の協働でカバーできる授業はできないものかと考えた。「学習者の興味・関心の掘り起こし」「学習者の興味追求」「学習者の問題解決」というキーワードから具体的な授業の進め方を摸索してきた。

3、身近な道具をつかってどんな運動ができるかな？

教室でいつも座っている「椅子」を体育館にもちこませ、椅子を使った運動を考えさせる。題して「身近な道具でスポーツしよう」である。一個の椅子と悪戦苦闘の末、いろいろな補強運動が出来上がる。それをグループ内で発表体験させ、グループ内で一番優秀だった作品を全体に発表させ、全員で体験する。次は椅子を使った競技を考案させる。椅子を丸く中央に集めその周りで歌いながら楽しそうに椅子取りゲームが始まった。（これは毎年必ず最初に現れる）つぎは、椅子渡し競技。グループの椅子を順番に送りながら代表の生徒が落ちないように壁まで走る競技。（2006前期）続いて、ジャンケンリレーがおこなわれた。椅子の山と椅子なしの部分でできるだけ早く走っていき、出会ったらジャンケンをしていく競技である。（2005後期）かなりの運動量を要するものができあがった。こうして、初めて出会った他学年の異性とも仲間をつくり、汗をにじませ、みんながスポーツを堪能していた。

4、身近なスポーツって遊ぶこと？

第2・3回は「昔の遊びを知ろう」をテーマに、まずは、祖父祖母、両親の子ども時代の遊び（ただし、身体的活動を主とした遊びに限定して）について自宅での調べ学習をさせておいた。授業では、2回にわたって発表会を開き、体験学習を行った。ボール一個を使った「王様、大将、中將、少將」四つのブロックに分かれて、ワ

ンバウンドでのボールのやりとりで勝敗を競う遊び。「三ぱん」、ボールのぶつけ合いをして、一人3回当てられた人がでたらゲーム終了という遊び。今も健在のかんけり、地面に描いたシマやラインを使って行う「S字おにごっこ」。生徒たちはいずれも夢中になって遊んだ。

(2005後期)そして、「遊び」の中で仲間をつくり、助け合い、楽しんだ。しかし、これまでの3時間を通して、「遊び」というものがただ単に楽しいだけのものではないことを感じたようだ。それは、「遊び」の中には、必ずルールが存在しており、それがスポーツと相通ずるものがあることを学んでくれたようだ。

5、ニュースポーツを体験しよう。

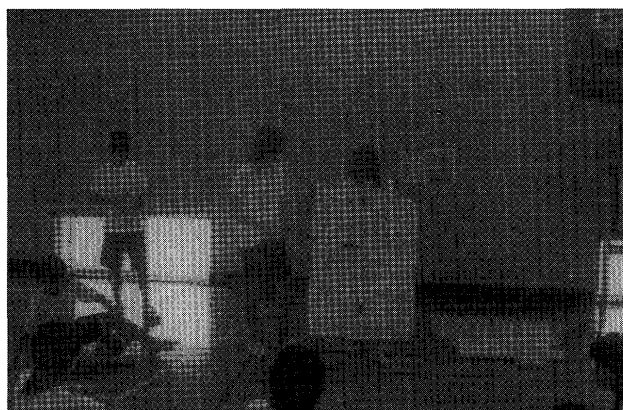
この異学年の男女の集団が遊びを通して、仲間意識と競争心を抱き始めたところで、新たなスポーツに取り組ませた。「ニュースポーツを知ろう」というテーマである。「インディアカ」「ソフトバレーボール」「フラッグフットボール」「ゲートボール」「スカイクロス」の中から、三種目を選んで体験させた。ニュースポーツを授業で体験するのは、もちろん全員の生徒が初めてである。ニュースポーツとは年齢・性別を問わず、障害者も、健常者もみんなで一緒にできるスポーツのことである。最近では生涯を通じてスポーツ活動を自分の生活の中に取り入れることを目的に行われる、いわゆる生涯スポーツとして急速に普及している。ダイエットのため、仲間をつくるため、運動不足解消のため、動くことが好きだから…などの理由で行われることが多い。前回までの遊びとは違い、今度は、決められたルールの中で、いかに仲間と力を合わせて勝利の喜びを勝ち取るのかということに、生徒たちは頭を使った。いわゆる体育科教材にはないニュースポーツは、生徒全員がこれらの競技に対する経験がなく、技能レベルが同じであることによって、運動の苦手な生徒でもあまり苦手意識を持つことなく、親しみやすく扱いやすいスポーツであるということである。そして、4・5人で行うチームスポーツのため、個人の満足に終わることなく、チームで話し合う、助け合うといったチームワークが知らず知らずのうちに確立していくことである。こうして、様々な活動を通して、生徒たちはスポーツの価値を感じ、また、楽しさを自分のものにしていったようだ。

6、新しいスポーツを創ろう！

最後のテーマを迎えた。幼い頃に自由に発想した遊びから、既成のニュースポーツから学んだことをもとに、みんなが楽しめるスポーツを創り出すことをねらいとした「新しいスポーツを創ろう」である。夢は大きく、生徒たちが考案したスポーツが、将来オリンピックでの正式種目になることを希望してみたのだが…。



発表資料作り (2006年前期)



発表風景 (2006年前期)

果たして、生徒たちは、どのようなスポーツを創り出してくれるのだろうか。1回目の授業で、生徒たちは体育館、グラウンド、体育倉庫とあらゆる施設、器具や道具を調べ、いろいろな使い方を試しながら、お互いの知恵を出し合い試行錯誤の末、各チームが力作を完成させた。

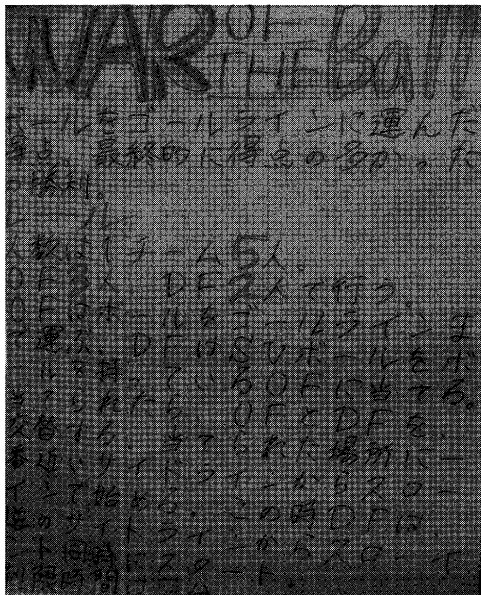


競技の準備 (2006年前期)

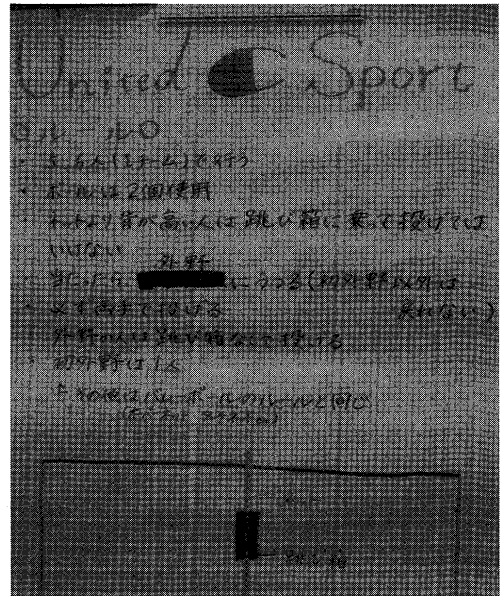


競技の体験 (2006年前期)

最後の授業、発表会と体験会を行う。できあがったスポーツのできばえはどうだろう？私も生徒たちもワクワクとした顔。みんなで考えたスポーツは、難しい技術は必要なく馴染みやすいうえに、勝敗を競うためにルールが工夫されていた。何よりもみんなが楽しみ、しっかり汗をかくことができる優秀作品ばかりだ。誰もができる技術、公正なルール、スポーツで大切な要素が組み入れられ、よく考えられている。昔の遊びをこの時代に合わせてアレンジしていたり、既存のスポーツのルールや道具を変化させたところもあるが、生徒たちは自分たちの楽しみ方を創り出したのだ。みんなが楽しめるスポーツづくり、この難しい課題に、日頃は受け身の多い生徒たちが意欲的にチャレンジした結果だと思う。



2005年後期最優秀作品
WAR OF THE BALL



2006年前期最優秀作品
United Sport

7、今後の課題 (選プロって役に立つの?)

スポーツは、金メダルを取ることだけが目的ではない。障害を持った人たち、高齢者、子ども、男、女、あらゆる人たちが、笑顔で共に汗をかき、爽快感やスポーツの楽しさを共有することも、スポーツならではの価値であり、そこにやりかいは見いだしている人も多い。ともすれば、学校の生徒たちは同学年、同性、同レベルの中で、勝敗や記録を競うことに終始しがちである。

生徒の作文より (2006前期 H. K)

とても楽しい授業でした。昔の遊びで夢中になって遊んだこと、ソフトバレーやゲートボールからニュースポーツの楽しさを教えてもらい、あまり難しくもないルールで色んな子たちと仲良く楽しめたことは感動ものでした。その仲間たちと作った United Sport が優秀賞に選ばれたことにはもっと驚かされた。～以下略～

上の作文にもみられるように、他学年あるいは異性といった、自分と異なる能力の者たちと支え合いながら、共にスポーツを楽しむ経験は、“みんなのスポーツ”をやがて社会に広げていく力となるだろう。

また、異学年、異性というクラスで行う選択プロジェクトは、いろいろな能力や立場の違いを乗り越え協力して頑張る力を生徒たちに確実に植え付けてくれていると確信している。

今後は、既成の種目にとらわれることなく、道具の工夫やコートのコ案までも創作できるような授業展開ができたらと思っている。

参考文献：名古屋大学教育学部附属中高等学校編著

「新しい中等教育へのメッセージ」黎明書房、2003年